

厚底靴に対する女子大学生の意識と実態

内田 有紀 平林 由果

金城学院大学生活環境学部

Consciousness and actual situation of women's college students
for platform shoes

Yuki UCHITA Yuka HIRABAYASHI

Faculty of Human Life and Environment, Kinjo Gakuin University

要約

近年、厚底靴の再流行とともに、2019年の春夏及び秋冬のトレンドの中にも多く取り入れられている。近年の厚底靴は、昔に比べ改良されて軽く歩きやすくなったと言われているが、その現状は明らかではない。そこで、最近の若者の厚底靴に関する着用実態とその意識について探るため、女子大学生を対象にアンケート調査を実施した。

女子大学生の厚底靴の所持率は、1990年代も2010年代も半数以上であるが、靴の種類や着用頻度については変化がみられた。厚底靴所持群は厚底靴に対して肯定的な意見を持っており、非所持群は否定的な意見を強く持っていた。厚底靴所持群は、靴の見た目や衣服のファッション性を重視する傾向にあり、怪我をしても、その厚底靴を履き続けていることが明らかになった。

厚底靴着用者は、衣服のファッション性にこだわりがあり、靴の見た目を気にする若者であった。厚底靴の購入に際しては、見た目のデザインだけでなく、歩行しやすさも考慮して選択し、厚底靴着用時には危険性を十分に認識して歩行してほしい。

1. はじめに

「お洒落は足元から」と言われるように、靴はファッションの重要なアイテムの一つである。靴のトレンドも衣服と同様に様々な種類のものが市場に出回り、若い女性の間ではファッション性の高い靴が流行している。このような中で、2019年の春夏・秋冬のトレンドに厚底靴も取り入れられ、再流行の兆しをみせた。

厚底靴は、1990年代に爆発的に流行し、街を歩く若い女性の多くが着用していた。その頃の厚底靴は重く怪我也多発しており、その危険性については様々な報告^{1, 2, 3)}がある。森ら⁴⁾は、厚底靴の着用により正常な歩行が妨げられ歩行速度が低下するとともに、すり足傾向の歩行になることを報告している。国民生活センター⁵⁾も注意情報やリーフレット等で注意喚起していた。それに比べ近年の厚底靴は、改良されて軽く歩きやすくなったと言われているが、その使用実態は明らかではない。

そこで、若者の厚底靴に関する現状を探るため、女子大学生を対象に厚底靴着用の実態とその意識についてアンケート調査を実施した。また、前回の流行当時の厚底靴に対する意識と違いがあるのかを確かめるため、山田ら⁶⁾が実施した1990年代の厚底靴に関するアンケート調査の結果との相違についても検討した。

2. 調査方法

調査は、愛知県内のK大学に通う18～21歳の女子大学生を対象に、集合調査による質問紙法により行った。調査は、2013年と2014年の2年にわたって実施し（以降、2010年代とする）、初年度は272名、次年度は194名を対象とした。質問紙は、山田ら⁶⁾の行った調査を参考に作成し、年代比較を行う項目については、山田らと同じ内容とした。質問項目は、厚底靴の所持に関する項目、怪我の有無や種類、厚底靴に対する意識などであった。日常の生活意識との関係进行分析するため、靴全般、衣服全般に対する意識についても尋ねた。1990年代の実態調査は、山田ら⁶⁾が1999年に関西の大学に通学する女子大生220名を対象に行ったアンケート調査の文献値を引用した。なお、本研究では、山田ら⁶⁾と同様に、ソールが3 cm以上のものを厚底靴と定義した。解析には、SPSS Statistic 24を用いて行い、有意水準は5%とした。

3. 結果

3-1. 厚底靴の実態と意識の年代別比較（1990年代と2010年代）

Fig.1に、厚底靴所持率の年代別比較を示した。厚底靴を1足以上所持していると回答した者は、1990年代は54.4%、2010年代は61.8%で、1割弱であるが増加していた。いずれの年代も厚底靴を半

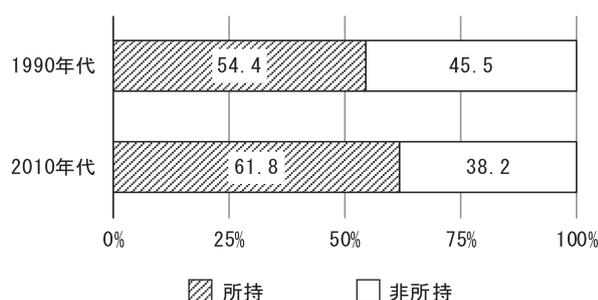


Fig.1 所持率の年代別比較

数以上の者が所持していることが分かった。

Fig.2に、厚底靴の着用頻度の年代別比較を示した。ほぼ毎日履くと回答した者は、1990年代は24.2%であるのに対し、2010年代は9.9%で半数以下に減少した。それに対

し、2010年代では週に1日や月に2～3回着用している学生が1990年代に比べて倍増しており、着用頻度が減っていることが明らかになった。

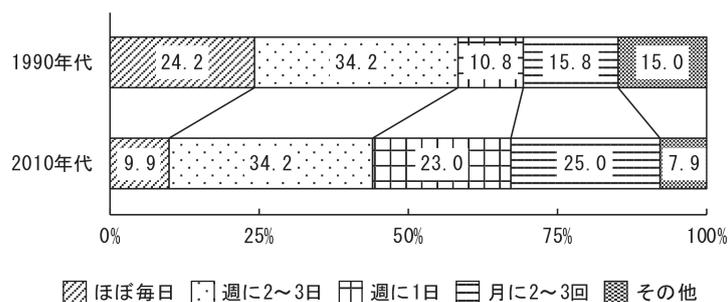


Fig.2 着用頻度の年代別比較

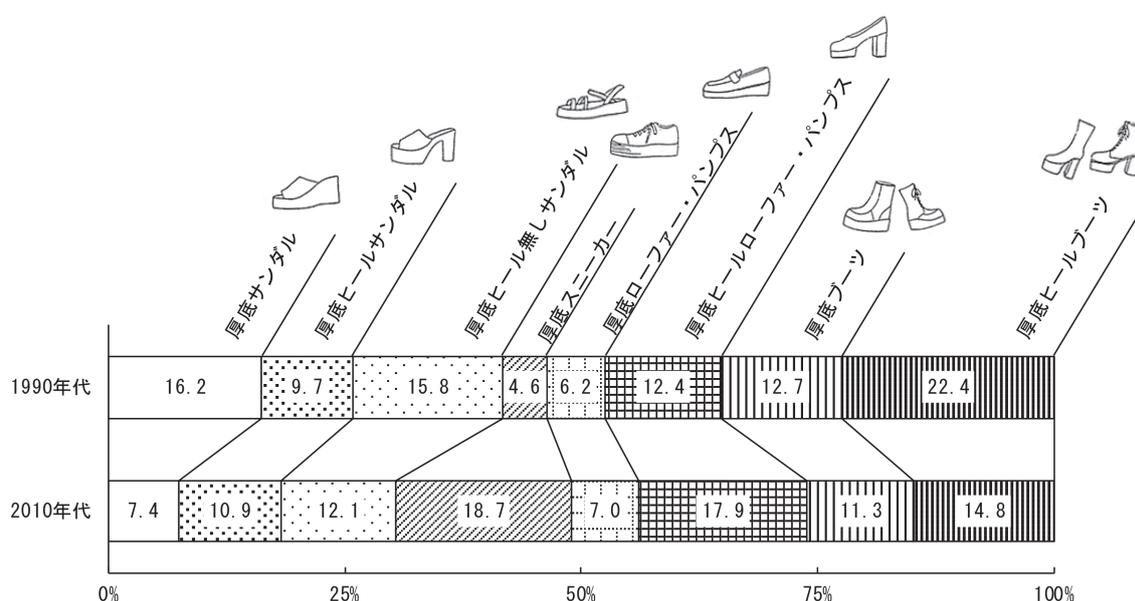


Fig.3 厚底靴の種類の年代別比較 (所持者)

Table 1 厚底靴を履く理由と履かない理由の年代別比較

厚底靴を履く理由 (%) (厚底靴所持者の複数回答)	n=120		n=151 [※]		厚底靴を履かない理由 (%) (厚底靴非所持者の複数回答)	n=100		n=109 [※]	
	1990年代	2010年代	1990年代	2010年代		1990年代	2010年代	1990年代	2010年代
服に合う	60.0	82.1	好みてない	76.0	63.3				
スタイルが良く見える	55.0	83.4	歩きにくそう	65.0	68.8				
背が高く見える	50.8	75.5	転びそう	52.0	70.7				
かわいいから	42.5	88.1	かっこ悪い	44.0	24.8				
履きやすいから	15.0	47.6	似合わない	31.0	44.1				
流行だから	14.2	41.7	背が高いから	10.0	24.8				
かっこいいから	10.0	49.0	欲しいがまだ買っていない	0.0	15.8				
歩きやすいから	4.2	33.2							
みんなが履いているから	3.3	11.2							
おしゃれな人が履いているから	1.7	21.8							

※: 2013年のみ

所持している厚底靴の種類について、1990年代は厚底ヒールブーツ（22.4%）が最も多く、次いで、厚底サンダル（16.2%）、厚底ヒール無しサンダル（15.8%）が多かった。しかし、2010年代には、厚底サンダルは7.4%と半数以下に減少した。2010年代に所持数が増えたのは、厚底スニーカーと厚底ヒールローファー・厚底ヒールパンプスで、厚底スニーカーは1990年代の約4倍であった（Fig.3）。

Table 1 に、厚底靴を履く理由（所持者）と履かない理由（非所持者）についての複数回答の結果を示した。厚底靴を履く理由は、いずれの年代でも「服に合う」、「スタイルが良く見える」、「背が高く見える」、「かわいいから」など外観を重視する項目が上位を占めていた。2010年代には、履く理由として「かっこいいから」、「履きやすいから」と回答した者が半数近くに増加した。厚底靴を履かない理由は、「好みでない」、「歩きにくそう」、「転びそう」がいずれの年代も上位を占めており、厚底靴非所持者は個人嗜好や機能性について重視していることがうかがえた。また、1990年代は「かっこ悪い」が多かったが2010年代には減り、むしろ「似合わない」との回答が増加しており、年代により意識が変化したことがわかる。

3-2. 厚底靴所持者の実態（2010年代）

厚底靴の所持者288名に対する厚底靴の所持数をFig.4に示した。2～3足所有しているが最も多く、約半数を占めていた。3割が1足は所持しており、10足以上所持している者が5%近くいた。

厚底靴着用時の怪我の有無をFig.5に示した。厚底靴を履いていて怪我をした経験があると回答したものは22.3%で、着用者の約4分の1近くの者が怪我を経験していた。怪我の内訳をみると、すり傷が最も多く約半数を占め、捻挫が3割を超えていた（Fig.6）。打撲などの症状も確認された。

Fig.7に、怪我をした時に履いていた靴の種類について示した。厚底ヒールローファー・パンプスが38.6%と一番多く、次いで、厚底ヒールサンダルであった。

Fig.8に、怪我をした場所を示した。怪我をした場所は、階段が最も多く32.6%であった。

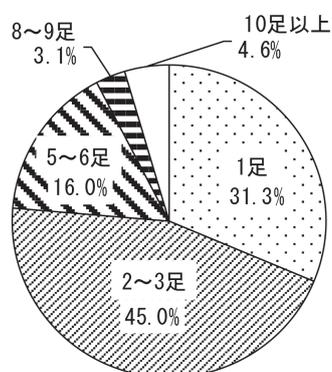


Fig.4 厚底靴の所持数（所持者）

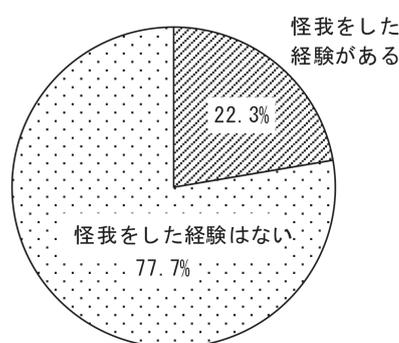


Fig.5 厚底靴着用時の怪我の有無（所持者）

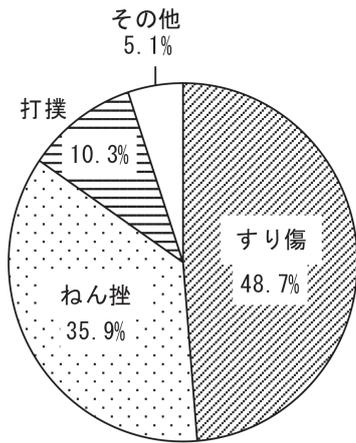


Fig.6 怪我の種類 (怪我の経験者)

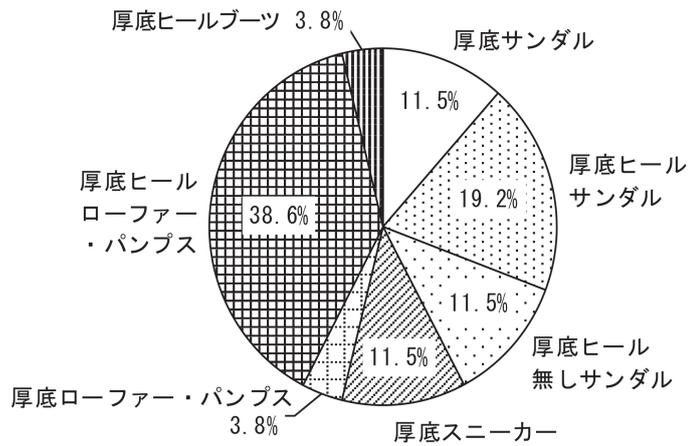


Fig.7 怪我をした時の靴種 (怪我の経験者)

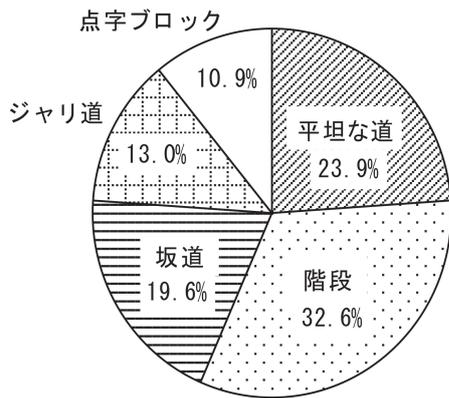


Fig.8 怪我をした場所 (怪我の経験者)

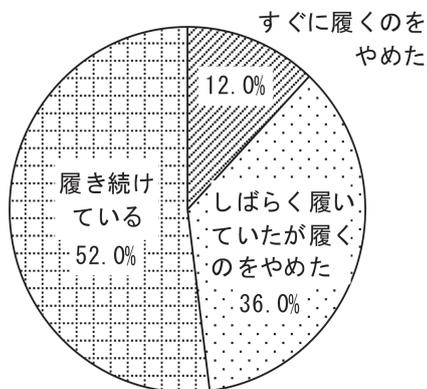


Fig.9 怪我をした後の対応 (怪我の経験者)

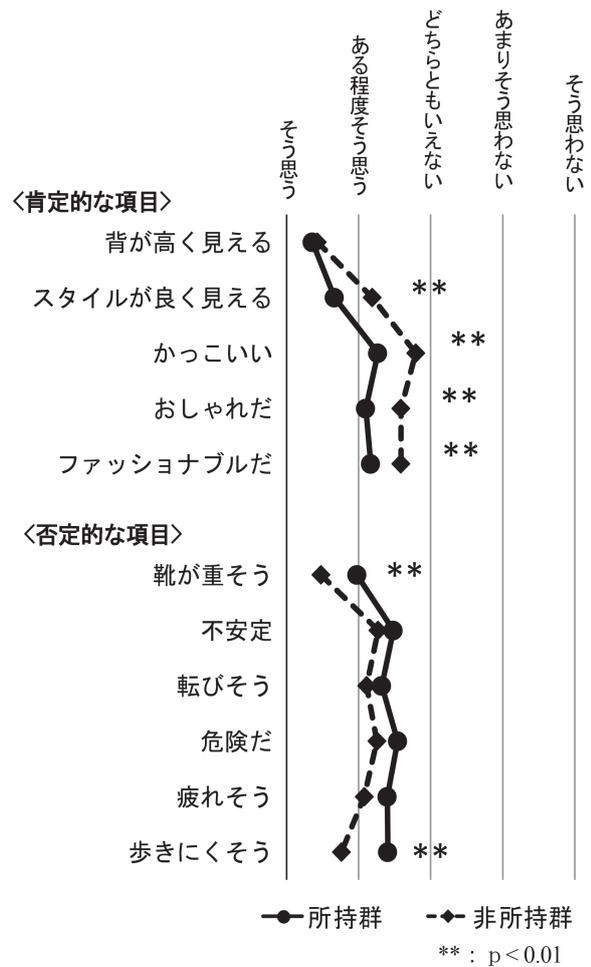


Fig.10 厚底靴に対する意識 (所持群と非所持群の比較)

平坦な道でも23.9%の者が怪我をしていることが明らかとなった。次いで、坂道、ジャリ道、点字ブロックの順であった。

Fig.9に、怪我をした後の対応について示した。怪我をした後、厚底靴をすぐに履くのをやめたと回答したものは12.0%で、5割以上の人が怪我をしてもそのまま厚底靴を履き続けると回答した。

3-3. 厚底靴に対する意識の比較（所持群と非所持群）

厚底靴を1足以上持っているとして回答した群を「所持群」、持っていないと回答した群を「非所持群」とし、所持群と非所持群の意識の違いについて検討した。

厚底靴に対する意識をFig.10に示した。「スタイルが良く見える」や「かっこいい」、「おしゃれだ」、「ファッショナブルだ」といった肯定的な項目については、所持群の方が非所持群よりも意識が強く、有意な差が認められた。逆に、否定的な項目については、非所持群の方がそう思うと回答した割合が高く、「靴が重そう」、「歩きにくそう」では有意な差が認められた。

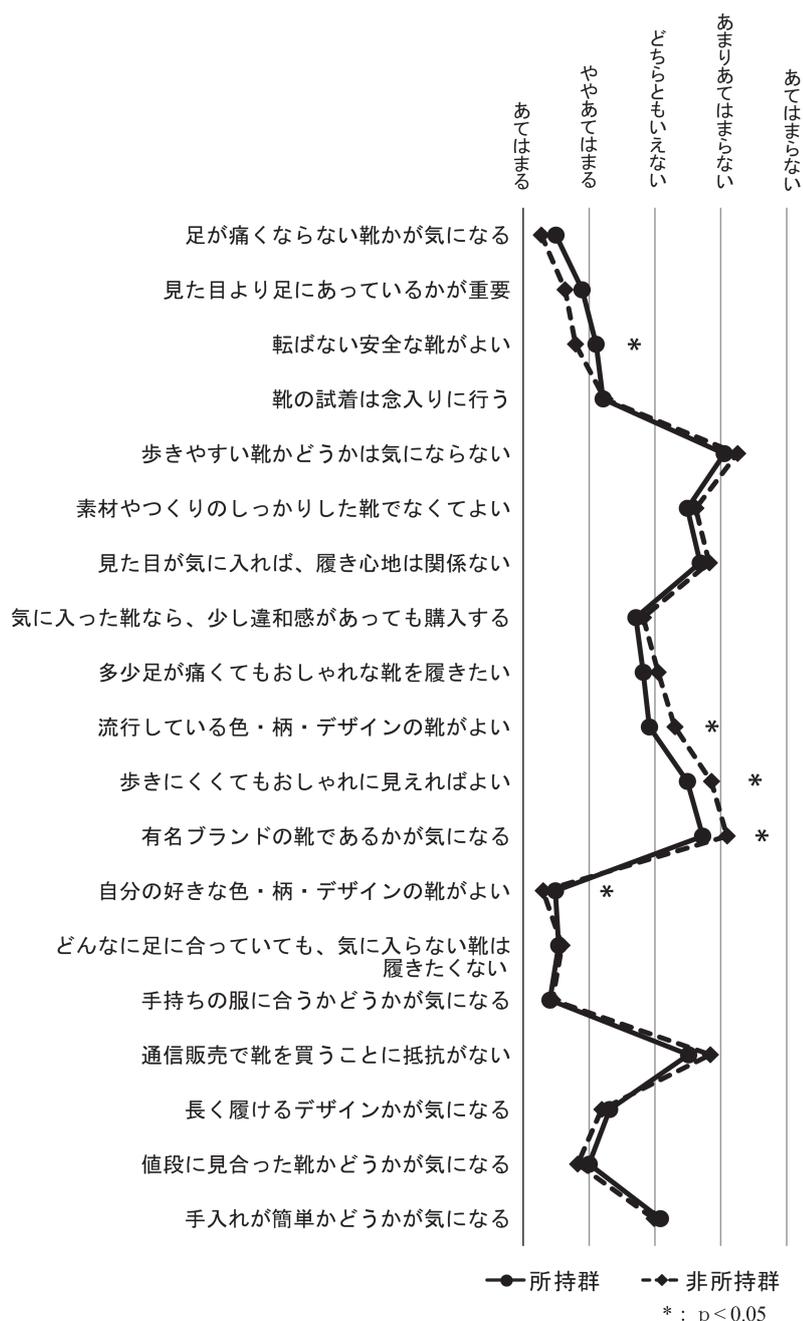


Fig.11 靴全般に対する意識（所持群と非所持群の比較）

3-4 靴・衣服に対する意識の比較（所持群と非所持群）

Fig.11に、靴全般に対する意識について示した。「流行している色・柄・デザインがよい」や「おしゃれに見えればよい」、「有名ブランド靴であるかが気になる」など、見た目に関する項目は、所持群の方が有意にあてはまる側の回答をしてきた。「足が痛くならない」や「見た目より足に合っているか」、「転ばない安全な靴がよい」といった安全性に関する項目については、非所持群の方が、あてはまる側の回答をしていた。

Fig.12に、衣服全般に対する意識について示した。「流行についてよく知っている」や「流行して

いる服を着る」などファッション性に関する項目については、厚底靴所持群の方があてはまる側の回答をしており、有意な差が認められた。「機能性」や「吸湿性」、「保温性・通気性」、「動きやすさ」など機能性に関する項目については、非所持群の方があてはまる側の回答をしており、機能性を重視している傾向にあった。価格に関しては、非所持群の方が所持群よりも価格の安さを求める傾向にあった。

靴全般に対する意識と衣服全般に対する意識について、主因子法を用いて因子分析（バリマックス回転）を行った結果を、Table 2に示した。靴に対する意識については、4つの因子

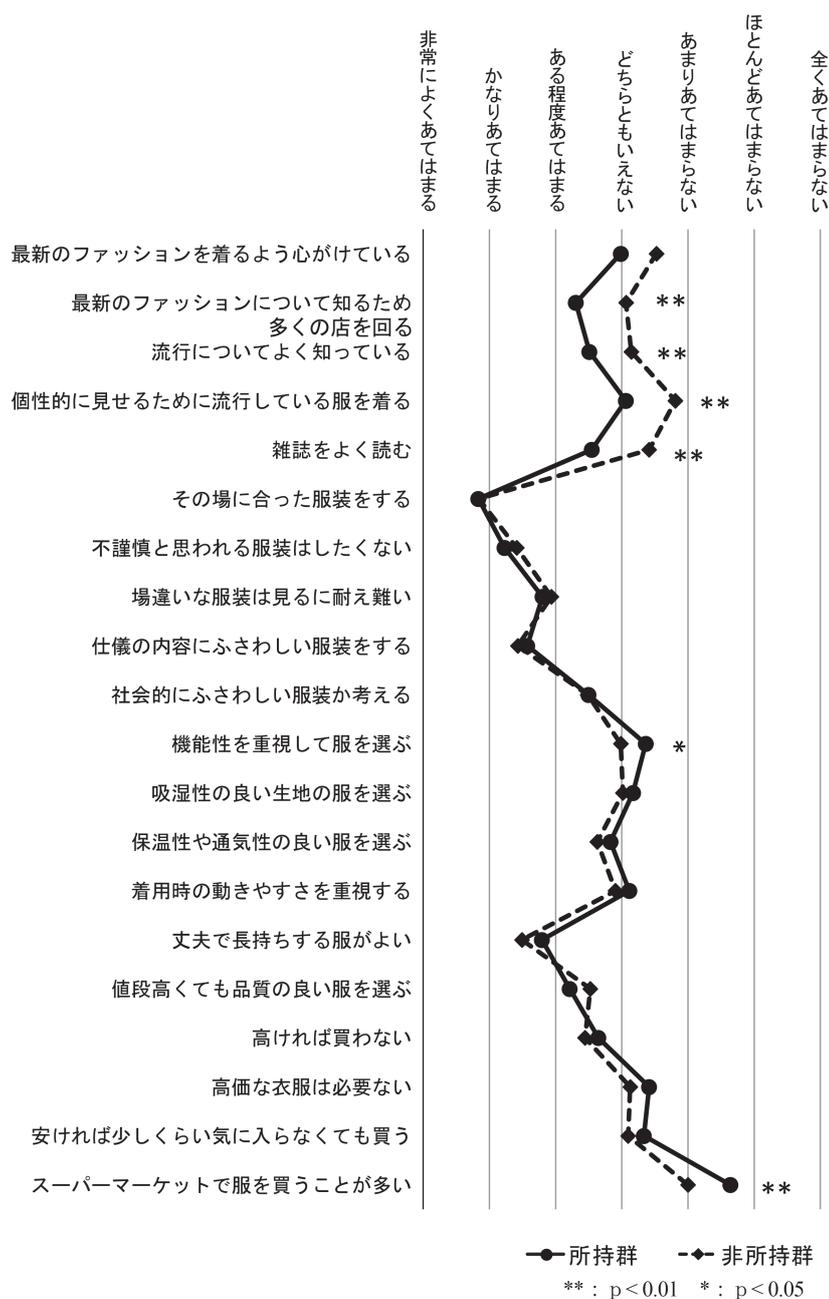


Fig.12 衣服全般に対する意識（所持群と非所持群の比較）

Table 2 靴全般および衣服全般に対する意識の因子分析結果

a) 靴全般に対する意識

	因子			
	見た目	無頓着	機能性	安全性
多少足が痛くてもおしゃれな靴を履きたい	0.880	0.113	-0.007	-0.071
歩きにくくてもおしゃれに見えればよい	0.691	0.212	-0.126	-0.222
気に入った靴なら、少し違和感があっても購入する	0.583	0.185	-0.118	0.006
見た目より足にあっていいるかが重要	-0.549	-0.241	0.076	0.318
見た目が気に入れば、履き心地は関係ない	0.537	0.439	-0.160	-0.222
流行している色・柄デザインの靴がよい	0.525	0.002	-0.046	-0.105
通信販売で靴を買うことに抵抗がない	0.291	0.694	-0.117	0.037
靴の試着は念入りに行う	-0.127	-0.593	0.122	0.039
自分の好きな色・柄デザインの靴がよい	-0.056	-0.366	0.136	0.126
長く履けるデザインかが気になる	0.018	0.135	0.749	0.009
素材やつくりのしっかりした靴でなくてよい	0.226	0.242	-0.472	-0.102
手入れが簡単かどうか気になる	-0.136	-0.127	0.448	-0.041
値段に見合った靴かどうか気になる	-0.122	-0.170	0.437	0.128
手持ちの服に合うかどうか気になる	0.069	-0.209	0.403	0.009
足が痛くならない靴かどうか気になる	-0.193	-0.014	-0.015	0.682
歩きやすい靴かどうかは気にならない	0.205	0.318	-0.198	-0.414
固有値	2.730	1.576	1.489	0.900
累積寄与率 (%)	17.06	26.91	36.22	41.84

b) 衣服全般に対する意識

	因子			
	ファッション性	TPO	機能性	価格の安さ
最新のファッションを着るよう心がけている	0.782	0.149	0.052	-0.009
最新のファッションについて知るため、多くの店を回る	0.707	0.117	-0.064	-0.076
流行についてよく知っている	0.676	0.234	-0.176	-0.194
個性的に見せるために流行している服を着る	0.646	-0.030	0.096	0.135
雑誌をよく読む	0.582	0.035	-0.046	-0.237
その場に合った服装	0.120	0.733	0.037	-0.089
不謹慎と思われる服装はしたくない	0.087	0.636	0.111	0.100
場違いな服装は見るに耐え難い	-0.020	0.623	-0.019	0.045
仕儀の内容にふさわしい服装をする	0.113	0.621	0.151	-0.028
社会的にふさわしい服装か考える	0.171	0.575	0.260	-0.031
機能性を重視して服を選ぶ	-0.103	-0.061	0.719	0.087
吸湿性の良い生地の服を選ぶ	-0.077	0.169	0.668	-0.041
保温性や通気性の良い服を選ぶ	-0.018	0.129	0.636	0.090
着用時の動きやすさを重視する	0.117	0.060	0.561	0.073
丈夫で長持ちする服がよい	-0.019	0.324	0.492	0.097
値段高くても品質の良い服を選ぶ	0.156	0.058	0.189	-0.752
高ければ買わない	-0.057	0.154	0.087	0.654
高価な衣服は必要ない	-0.167	0.039	0.167	0.654
安ければ少しくらい気に入らなくても買う	0.089	-0.093	0.059	0.578
スーパーマーケットで服を買うことが多い	-0.061	0.015	0.371	0.505
固有値	2.486	2.335	2.289	2.183
累積寄与率 (%)	12.43	24.10	35.55	46.46

が抽出された。おしゃれな靴を履きたいやおしゃれに見えればよいといった項目から第一因子として「見た目」、通販での抵抗感がなく、試着は念入りには行わないなど第二因子として「無頓着」、長く履けるデザインや素材や作りの丈夫さといった項目から「機能性」、足が痛くならないや歩きやすいという項目から「安全性」の因子とした。衣服に対する意識についても4つの因子が抽出され、第一因子として、ファッションや流行といった項目から「ファッション性」、第二因子として、その場にあった服装やふさわしい服装といった項目から「TPO」、衣服の機能性や吸湿性・保温性などの「機能性」、高ければ買わないやスーパーで買うなどから「価格の安さ」とした。

4. 考察

靴全般に対する意識と衣服全般に対する意識を厚底靴所持群と非所持群で比較したところ、いくつかの項目について有意な差が認められ、厚底靴の所持と日常生活意識は関連していることがわかった。因子分析から抽出された因子に関して、厚底靴所持群と非所持群それぞれの因子得点の平均値のチャート図をFig.13に示す。a)の靴全般に対する意識において、所持群は、靴の見た目は重視するが、靴購入に関しては無頓着であり、非所持群は靴の機能性、安全性を重視する傾向にあることがわかった。b)の衣服全般に対する意識では、所持群は、衣服のファッション性を重視しており、非所持群との間に有意差が認められた ($P<0.01$)。非所持

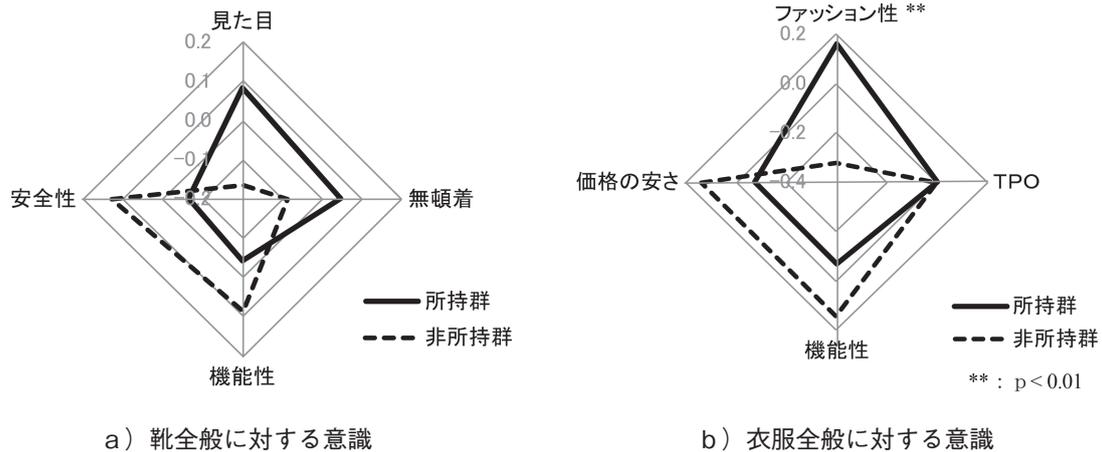


Fig.13 靴および衣服全般に対する意識の因子得点（所持群と非所持群の比較）

群は、衣服の機能性を重視しており、衣服にはお金を掛けない傾向にあった。厚底靴を履いている所持群は、衣服のファッション性にこだわりがあり、靴の見た目を気にする集団であった。非所持群は、ファッションにお金を掛けず、衣服や靴の機能性を重視し、厚底靴を履かない集団であることが明らかになった。

厚底靴の実態を調査し、1990年代との違いを検討したところ、いずれの年代でも半数以上の若者が厚底靴を所持しており、最近の方がわずかながら所持率は増加していることが確かめられた (Fig.1)。所持している厚底靴の種類については、年代による相違がみられた。前回の流行時 (1990年代) は、厚底ヒールブーツや厚底サンダルが多かったのに対し、最近では、厚底スニーカーが顕著に増加した (Fig.3)。ファッションのカジュアル化により、デザイン性の高いスニーカーが増えたことが要因であると考えられる。一方、着用頻度にも変化がみられ、1990年代に比べて、毎日着用する人が減り、たまに履く人が増えた (Fig.2)。前回の流行時は、流行を牽引している層が厚底靴を所有し、ほぼ毎日着用していたと考えられる。それに対し、最近では厚底靴をたまにしか履かない層も、ファッションの一つとして所持することで所持率が増加し、その結果、着用頻度が低下したと推察される。また、最近のファッションは多様化し、さまざまなデザインの商品が販売されており、若者は、種類の多いトレンド靴を所有し、それらを履きまわしていると考えられる。

厚底靴を履く理由について、1990年代には1割ほどであった「かっこいいから」、「履きやすいから」の回答が2010年代は5割ほどに増加し、履かない理由で「かっこ悪い」が減り、厚底靴に対する意識に年代による変化がみられた (Table 1)。また、最近の厚底靴所持者は厚底靴に対して肯定的で、厚底靴に対する意識においては「かっこいい」、「おしゃれた」という意識が高かった (Fig.10)。厚底靴の機能性やデザイン性が改良され、見た目もよく、歩きやすくなったことがその要因であると推測される。

厚底靴所持者の着用実態として、着用者の約4分の1近くの者が怪我をした経験があり、その怪我也軽度なすり傷が約半数ではあったが、捻挫や打撲といった中程度の怪我也多くみられ

た (Fig.5, 6)。国民生活センター⁵⁾ は、1999年に厚底靴着用により脱臼・捻挫や骨折を起こしやすくなると注意喚起をしており、近年では骨折まではないものの注意が必要であると言える。怪我をした場所も、階段やジャリ道などは推測できるが、平坦な道でもかなりの人が怪我をしており (Fig.8)、片瀬ら³⁾ や森ら⁴⁾ が述べているように、厚底靴ではすり足や不安定な歩行姿勢になるため、平坦な道でも転倒の可能性が高いものと推察される。著者らの研究においても、厚底靴は、スニーカーに比較すると不安定なため、上半身への負担も大きく、バランスの悪い歩行姿勢になっていることが確かめられた⁷⁾。怪我をした後、すぐに着用を止めた者は12%にとどまり (Fig.9)、半数以上の者が履き続けていることは驚きであるが、いずれの靴種においても怪我をする危険性は示唆されており (Fig.7)、危険性の高い厚底靴を履き続けることに対し、警鐘を鳴らす必要があると思われる。

厚底靴着用者は、衣服のファッション性にこだわりがあり、靴の見た目を気にする若者であることから、厚底靴の危険性を認識しながらも、ファッション性を優先して履き続けているという実態が明らかとなった。厚底靴の購入に際しては、見た目のデザインだけでなく、歩行しやすさも考慮して選択してほしい。また、厚底靴着用時の歩行には十分に注意をする必要があることを認識した上でファッションを楽しむことを提案する。

5. まとめ

近年の厚底靴に対する女子大学生の実態及びその意識について調査した結果、以下のことが明らかとなった。

- ① 女子大学生の厚底靴の所持率は、1990年代も2010年代も半数以上であるが、靴の種類や着用頻度については変化がみられた。
- ② 厚底靴所持群は厚底靴に対して肯定的な意見を持っており、非所持群は否定的な意見を強く持っていることがわかった。
- ③ 厚底靴所持群は、怪我をした経験があっても厚底靴を履き続けており、靴の見た目や衣服のファッションに対して強く意識していることがわかった。

以上より、厚底靴着用者は、衣服のファッション性にこだわりがあり、靴の見た目を気にする若者であることから、厚底靴の購入に際しては、見た目のデザインだけでなく、歩行しやすさも考慮して選択し、厚底靴着用時には危険性を十分に認識して歩行してほしい。

引用文献

- 1) 石井照子：「厚底靴の危険性」日本家政学会誌, 50 (8), 871-875 (1999)
- 2) 花田美和子, 豊田陽子, 石井照子, 大野静江：「女子大生の履物の動向調査－厚底サンダルについて－」日本衣服学会誌, 42 (3), 193-198 (1999)
- 3) 片瀬眞由美, 塩之谷香, 栗林薫：「女子学生における厚底靴着用の問題点」金城学院大学消費生活科学研究所紀要, 4 (2), 13-22 (2000)

- 4) 森由紀, 大森敏江, 木岡悦子:「足圧分布および筋電図解析からみた流行靴の問題点」日本家政学会誌, 52 (5), 411-420 (2001)
- 5) 国民生活センター:消費生活年報2000, 国民生活センター, 141-142 (2000)
- 6) 山田由佳子, 槌谷尋香, 奥窪朝子:「厚底靴に対する意識と着用の実態-女子高校生および女子大学生を対象として-」生活文化研究(大阪教育大学家政学研究会), 42, 49-62 (2002)
- 7) 内田有紀, 平林由果:「厚底靴の歩容について」第71回年次大会研究発表会要旨集(日本衣服学会), 12-13 (2019)